

# 現代の子どもの

## 生活技術に関する調査研究Ⅵ

高橋 弥生

谷田貝公昭

### 1. はじめに

われわれはこれまで、さまざまな生活技術について、子どもたちがどのくらい習得できているのか、その現状について調査を続けてきています。ここで扱う生活技術とは、日常生活をする上で必要となる技術のことで、特別に難しいものではありません。ゆえに、本来ならどの技術についても習得できているべきものです。

ところが調査を始めて以来、獲得される技術は減

るばかりで、獲得する年齢も高くなってきています。子どもの生活が、実体験を伴わない、人任せの生活になってきているのではないのでしょうか。

今回われわれは、一九八八年（一部一九八九年）に行った調査<sup>注1</sup>とはほぼ同じ内容の調査を行い、その結果を日本保育学会に発表しました<sup>注2</sup>。調査結果をもとに、現代の子どもの生活技術の習得状況を明らかにすると共に、約20年間にどのような変化があったのかを明らかにしたいと考えています。

## 2. 調査の概要

今回の調査は、以下のように行いました。

(1) 調査期間 平成二十一年八月二十一～二十三日、  
十月十七～十八日

(2) 調査地域 福島県いわき市、栃木県宇都宮市

(3) 調査方法 二名以上の調査員の前で実技を行わせ判定をする。

### (4) 調査内容と判定基準

調査項目は以下の9項目です。まずその技術を使った経験があるかどうかについて質問し、その後に実技調査を行いました。

判定は、a～cの段階にわけています。判定aは「できる」ということです（判定基準の詳細は注2を参照のこと）。

- ①ライターで火をつける（使い捨てライター）
- ②マッチで火をつける
- ③安全ピンをとめる（学校用名札）

④食器を並べる（茶碗、汁椀、箸）

⑤食器の持ち方（茶碗）

⑥針に糸を通す

⑦ヤクルトの蓋ふたを開ける

⑧ナブキンで弁当箱を包む

⑨缶詰の蓋を開けたことがあるか経験を問う

### (5) 調査対象

今回の調査は小学生を対象に行いました。

男子384名、女子456名、計840名です。

なお、一般の精神発達検査作成と同様に、同一年齢段階児の70～75%が望ましい回答をしている場合に自立したとみなしています。

## 3. 今回の調査の結果について

### ①ライターで火をつける

この項目に関しては、子どものライター遊びによる事故が後を絶たないこともあり、子どもには触れさせない方針の家庭が増えているようです。調査を

していても、「触ったらしかられる」「怖いからやりたくない」という子どもが少なくありませんでした。そのため六年生でも経験は50・4%で、判定aの子どもは六年生でもわずか36・4%でした。

## ② マッチで火をつける

簡易な使い捨てライターが一般的になってきてから、家庭のマッチ使用は減ってきています。しかし小学校高学年の理科の実験の時には、いまでもマッチを使用しています。調査結果にもそのことは表れており、四年生まで30%にも満たなかった経験が、五年生になると90%を超えるのです。ところが実技判定の結果は経験とはかけ離れており、六年生でも26・7%にしかありません。調査をしていても、マッチの扱い方がぎこちない子どもが非常に多くいました。火で手をあぶってしまうようなマッチの持ち方をするので、熱さのために火のついたマッチを投げ捨てる、という危険な場面も何回か見かけました。

## ③ 安全ピンをとめる

安全ピンは、学校の名札に付いていることもあり、一年生でも約90%の経験がありました。しかし実技調査をすると、a判定となった子どもの割合は6年生でも60%ほどしかおらず、小学校での自立は見られませんでした。

## ④ 食器を並べる

これについても、経験については非常に高い割合になりました。安全ピンと同様に、一年生から約90%となっています。家庭で、お手伝いなどをしながら食器を並べるのではないのでしょうか。しかし、これも実技に関する結果は思わしくなく、判定aは六年生でもやっと50%を超える程度でした。

## ⑤ 食器を持つ

食器を持つことに関しては、当然ですが、経験がない子どもはほとんどいませんでした。ところが、茶碗を正しく持てる子どもが驚くほど少ないのです。六年生で39・7%という低い数値でした。人差

し指を茶碗のふちにかけたり、手のひらの上に乗せるように茶碗を持つたり、という持ち方が目立っていました。

⑥ 針に糸を通す

家庭科の始まる五年生になると、経験ありも実技a判定も、その割合が急に上昇します。それほど難しい技術ではないので、一回でも経験があればある程度できるようです。

⑦ ヤクルトの蓋を開ける

経験、実技とも、もつとも良い結果だったのがこの項目です。不思議なことに食器を持つ経験よりも、ヤクルトの蓋を開ける経験のほうがわずかに高い、というほど、ほとんどの子どもたちが経験をしています。また、実技判定の結果も良く、一年生の段階から判定aが70～75%の自立ラインを超え、自立しているのです。

⑧ ナプキンで弁当箱を包む

今回の調査項目の中でもっとも悪い結果となった

のがこの項目です。経験は一年生でも半数を超え、五年生では70%を超えます。しかし実技は判定aになったのは1%ほどで、ほとんど全員ができなかったといっても過言ではありません。ナプキンの位置に対して、弁当箱を置く位置が間違っている子どもが非常に多く、基本的な技術が全く身につけていないことがわかります。

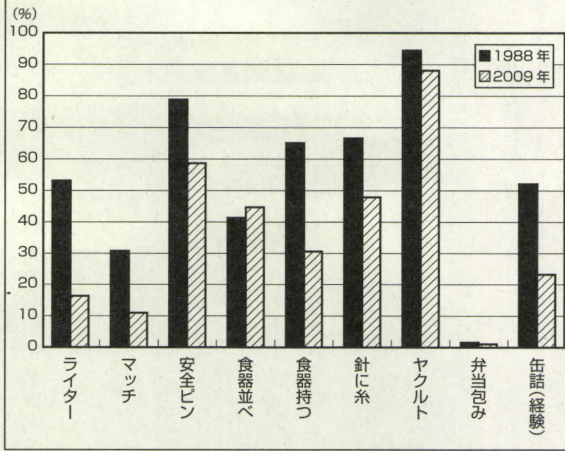
⑨ 缶詰の蓋を開ける（経験のみ）

最近では、市場に出回っている缶詰のほとんどがブルトツプ式の蓋になっています。今回は缶切りを使って缶詰を開けたことがあるかどうか、その経験だけを聞きました。缶切りを使用しなければならぬ缶自体が少なくなっているため、当然その経験は少なく、六年生でも半数以下でした。

4. 一九八八年の調査結果との比較

図1には、一九八八年（ヤクルトのみ一九八九年）と二〇〇九年の調査結果を示しました。これを

図1 実技判定 a (1988年と2009年の比較)  
※全学年の平均値



見ると、約20年の間に子どもたちの生活技術が非常に低下していることがよくわかります。表1には、実技が70〜75%を超えて自立した項目と、その学年を示しました。今回の調査で実技が自立したのは、「ヤクルトの蓋を開ける」「針に糸を通す」のたったの2項目でした。

ライターについては、

社会の風潮として子どもには扱わせないようになってきているため、経験が減り、当然ながら実技の結果も悪くなっています。マッチについては、学年別の調査では四

表1 判定aが70%以上の項目

| 1988年      | 2009年      |
|------------|------------|
| ライター(5年)   | 針に糸を通す(6年) |
| 安全ピン(3年)   | ヤクルトの蓋(1年) |
| 食器を持つ(4年)  |            |
| 針に糸を通す(5年) |            |
| ヤクルトの蓋(1年) |            |

( )内は自立学年

年生までの経験・実技結果共に一九八八年に比べるとかなり低くなっています。ただ、五〜六年生に限り経験の値は一九八八年とさほど違いません。にもかかわらず実技結果は一九八八年の約半数の値でした。危険を理由に子どもたちから火の扱いを遠ざけた結果、高学年になっていざマッチを使わせようとしても、火の性質がわからないのでしよう。そのため、むやみに火を怖がったり、逆に危険な扱い方をしてしまった結果となっているようです。

安全ピンの使用に関しては、以前は小学生がいつ

も付けていた名札を、不審者に名前を知られない配慮からあまり使用しなくなったことが影響していると思われます。経験はあるものの、その使用頻度はかなり少なくなっているでしょう。調査では、名札を付けるために服を強く引つ張ったり、まっすぐ付けられなかったりする子どもが目立ちました。

非常に気になるのは、正しく食器を持つことができなくなったことです。経験は、一九八八年は全年100%でしたが、今回はどの学年も100%に達していません。調査で使ったのは、一般的な箸、茶碗、汁椀です。これを使用したことがない、という子どもがどの学年にもいるのです。家庭での食事の様子が気になるところです。そして実技の結果はさらに心配です。今回は、なんと高学年でも約4割の子どものみしか正しく食器を持つことができなかつたのです。20年間で、家庭での食事の様子がどのように変化したのか、また、親のしつけに対する意識がどのように変化したのか、大変心配になります。

## 5. おおめ

20年間の変化は予想以上に悪い結果となりました。社会の変化と共に使われなくなっていく技術もあるでしょうが、子どもの生活を考える時、これほど急激にできないことが増えたというのは、不安を感じざるを得ません。実体験の伴わない生活が増えてきていることを示しているのではないのでしょうか。保育や教育の現場では、このような子どもたちの実態を把握した上で、さまざまな指導や援助の計画を立てていかななくてはならないということになるでしょう。

(目白大学人間学部子ども学科)

### 注

- 1 谷田貝公昭他「子どもの生活技術の実態に関する調査研究Ⅱ」家庭教育研究所紀要NO. 11 一九八九年
- 2 谷田貝公昭他「現代の子どもの生活技術に関する調査研究Ⅵ」日本保育学会第63回大会発表論文集

P. 714 二〇一〇年